

## Doctor Dolittle と「ペット」の関係 ——*The Story of Doctor Dolittle* を中心に——

若谷 苑子

### はじめに

動物と人間が言語を介して会話をする物語には、特定の間が動物の言語を話すことによって動物との言語によるコミュニケーションが可能になるものがある。Rudyard Kipling の *The Jungle Book* (1894) と *The Second Jungle Book* (1895) における少年 Mowgli の物語がその一つであるが、Hugh Lofting による *The Story of Doctor Dolittle* (1920) をはじめとする〈Doctor Dolittle〉シリーズ<sup>1</sup>もまた、人間が動物の言語を習得することによって動物と会話ができるようになる物語である。〈Doctor Dolittle〉シリーズでは動物語を習得することで多種の動物と会話できる獣医 Dolittle の冒険を通して人間と動物の様々な関係が描かれている。

シリーズ第一作である *The Story of Doctor Dolittle* は、シリーズの多くの作品と異なり Tommy Stubbins という語り手は明示されず、“ONCE upon a time” (21) という言葉からはじまるが、シリーズの後の巻にも繋がる特徴が表れた作品でもある。第一に、本シリーズの最大の特徴であり Dolittle を Dolittle たらしめる要因でもある動物語 (animal-language) を彼が知り、習得する過程や、動物語とは如何なるものがこの巻において語られている。また、後続の巻でも見られる Dolittle という人物の性格、例えば彼の動物と人間に対するスタンスやお金に対する感覚なども描き出されている。それゆえに、*The Story of Doctor Dolittle* を中心として物語を読み解くことは、シリーズ全体の読解に大きく貢献するだろう。

そこで本研究では、*The Story of Doctor Dolittle* を中心に、シリーズに描かれる Dolittle と彼とともに暮らす動物との関係を、その動物たちを示す際にたびたび使用される「ペット (pet)」という語に着目して読解する。この「ペット」という語は、*The Story of Doctor Dolittle* の開幕で次のように登場する。

He was very fond of animals and kept many kinds of pets. Besides the goldfish in the pond at the bottom of his garden, he had rabbits in the pantry, white

mice in his piano, a squirrel in the linen closet and a hedgehog in the cellar. He had a cow with a calf too, and an old lame horse – twenty-five years of age – and chickens, and pigeons, and two lambs, and many other animals. But his favourite pets were Dab-Dab the duck, Jip the dog, Gub-Gub the baby pig, Polynesia the parrot, and the owl Too-Too. (22)

上記の引用から、Dolittle と動物たちは「ペット」という語で結ばれる関係にあることが理解される。しかし、実際に Dolittle とともに暮らす動物たち、特に「お気に入りのペット (“favourite pets”)」は、Dolittle 家の家事を切り盛りしていた Dolittle の妹 Sarah が家を出た後、彼女の代わりに Dolittle 家の家事を取りしきるようになる。愛玩動物という意味での「ペット」ではなし得ないような形で動物たちは Dolittle 家に貢献するのだ。作中ではその後も幾度か Dolittle とともにいる動物には「ペット」という語が使用されるのだが、これらのことを考慮すると、Dolittle と彼の「ペット」として紹介された動物たちは「ペット」という語で片づけられない関係のように思われる。しかし、この「ペット」という語に着目した研究はほとんど見られなかった。

Margaret Blount は、“The Doctor, on his travels round the world like a modern St Francis/Robin Hood, righting various wrongs that have been done in the animal kingdom is, of course, in an impregnable position; most saints are. With every animal and bird on his side, he cannot lose; and as an Animals Liberation leader, he does have some very good ideas;” (200) と、Dolittle が作中世界において動物の主導者的存在であることを指摘する。彼女は Dab-Dab らを “The Doctor’s domestic pets” (200) と示しているが、Dolittle と彼とともに暮らす動物との関係を「ペット」という語に着目して触れてはいない。

Gary D. Schmidt は動物の言語を習得したことによる Dolittle の動物と人間のなかでの位置づけの変化を、“When Polynesia, the Doctor’s parrot, teaches him how to speak various animal languages, the doctor abandons his human practice and becomes a veterinarian. Since he can communicate directly with animals—and since he is, above all, a kind of human—he becomes beloved throughout the animal world.” (16) と指摘し、さらに、“For in *The Story of Doctor Dolittle* (though not in the later novels), Dolittle is a child. He carries the same levels of responsibility and the same sense of respectability that a child might have.” (19) というように、*The Story of Doctor Dolittle* における Doctor が “child” であるという興味深い指摘を行っている。しかし、彼もまた「ペット」という語の使用や Dolittle と「ペット」との関係には踏み込んでいない。

Catherine L. Elick はシリーズではしばしば転覆が見られると指摘するなかで、“Clearly, Hugh Lofting is successful in envisioning situations in which species other than *Homo sapiens* are empowered, and just as clearly, language is central to animal liberation in these books.” (76) と指摘する。本論文第1章でも確認するように、これらの物語において動物が言語を持っているということは動物と人間の関係に重要な役割を果たしている。また、“the subversive and liberating power of carnival is already at work in the world of these novels through the Doctor himself, who is a figure of misrule, a carnival king who mocks human authority and works to upend the hierarchy that places animals beneath people” (82) と、Dolittle の働きについて指摘している。しかし、「ペット」という語に注目した言及は見られない。

青木由紀子は『七つのテーマから読み解く英米児童文学』(2009)において〈Doctor Dolittle〉シリーズに「登場する動物たちの人間化がある程度制限され」(226)ており、食も住居も基本的に現実に生きる動物に近い形で描かれていることを指摘する。さらに続編である *Doctor Dolittle's Circus* の例を挙げて、作中世界における Dolittle 以外の人間と動物について、「動物と人間のかかわりは、完全に現実的なものである」(229)と述べている。しかし、Dolittle と彼の「ペット」との関係については言及していない。

本研究における問いは、Dolittle の「ペット」としてテキストで示される動物は「ペット」という語で収まる存在なのか、彼らの関係は「飼い主」と「ペット」であるのか、というものである。物語を読んでいるとどうもそのようには考えられない。それは、多くの研究者や批評家が Dolittle の「お気に入りのペット」として紹介された動物を「ペット」という語で指示していないことから推測できる。南條竹則は Dolittle の家族に動物たちを含めており(南條 111)、〈Doctor Dolittle〉シリーズを人種差別だと批判する Isabelle Suhl はそれらの動物たちを Dolittle の“animal friends”(Suhl 152)と呼ぶ。意識的に、あるいは無意識的にこれらの動物たちは研究者によって作中で表される「ペット」という語ではなく、「家族」や「友」と表現されていることが散見される。しかし、シリーズが進むにつれて「ペット」という語だけでなく動物たちは「家族 (family)」という語で示される場合も増えるが、*The Story of Doctor Dolittle* ではこの「ペット」という語が頻繁に使用されている。そのため、「ペット」という語から Dolittle とその「ペット」の関係を検討することは、シリーズにおける Dolittle と動物の関係の側面を導き出すことになるだろう。

Suhl のように、シリーズが人種差別的だという批判もある<sup>2</sup>。しかしそれは Sheila A. Egoff や石井桃子が指摘するように Lofting が生きていた時代が反映されているのであって (Egoff 108; 石井 190)、シリーズにおける主題は人間と動物との関係であると

考える。なぜなら、Lofting 自身が語っているように、物語の誕生は Lofting が従軍していたときの戦地における負傷兵と負傷した軍馬の扱いの差異に端を発しているからだ。治療される人間と治療されずに放り出される馬について、Lofting は “This did not seem quite fair.” (“Hugh Lofting” 198) と述べている。Egoff の言葉を借りれば、“the Doctor Dolittle books will have to be appreciated for their look at the animal world rather than the human” (108) なのである。また、本論文は「もの言う動物と人間の関係」という文脈から読み解くものである。そのため、上述の人種差別や性差別という観点での考察は行わない。

研究構成としては、作中世界における動物の位置づけと Dolittle の位置づけをそれぞれ考察したうえで、「ペット」と呼ばれる動物たちと Dolittle の関係を探求する。

## 第1章 作中世界における動物の位置づけ

本シリーズの強力な特徴でもあるが、作中世界では動物たちの言語「動物語」というものがあることが示されている。Dolittle に動物語を教えたオウム Polynesia によると、動物語は人間が使用する言語とは異なり、尻尾を振ったり、鼻をひくつかせたりといった身体的な動きである (*The Story of Doctor Dolittle* 33)。以下は Dolittle がはじめて動物語の存在を知り、Polynesia に教えを乞う場面である。

“Oh, we parrots can talk in two languages – people’s language and bird-language,” said Polynesia proudly. “If I say, ‘Polly wants a biscuit,’ you understand me. But hear this: *Ka-ka oi-ee, fee-fee?*”

“Good gracious!” cried the Doctor. “What does that mean?”

“That means, ‘Is the porridge hot yet?’ – in bird-language.”

“My! You don’t say so!” said the Doctor. “You never talked that way to me before.”

“What would have been the good?” said Polynesia, dusting some biscuit-crumbs off her left wing. “You wouldn’t have understood me if I had.”

“Tell me some more,” said the Doctor, all excited; and he rushed over to the dresser-drawer and came back with the butcher’s book and a pencil. “Now don’t go too fast – and I’ll write it down. This is interesting – very interesting – something quite new. Give me the Birds’ A B C first – slowly now.” (*The Story of Doctor Dolittle* 31-32)

動物好きとはいえ動物語があったということを知らなかった Dolittle の驚きは、作中世界において一般的に動物語があるということが人間に認知されていないことを示唆する。言語を持つか否かという点において、Dolittle を含めた人間たちはおそらく人間と動物の間に一線を引いていたのだと考えられる。しかし上記で Polynesia が明かしたように、動物にも動物語がある。それらは多くの人間が言語として理解できる形で示されているわけではないけれども、存在する。つまり、言語を持つか否かで線が引かれているかに見えた動物と人間の間には、言語——英語、鳥の言語、あるいは別の動物の言語——の違いはあれども、線などなかったということが英語と鳥の言語を話せる Polynesia によって明らかにされたのである。さらに動物語の存在が明らかにされた後、動物語は作中の人間たちが話す言語と同様引用符（“ ”）を用いられ、その内容が会話として示される。これによって言語という点における動物と人間の区別は曖昧になっている。

上記の引用では、動物語は人間でも習得が可能であることもまたほめかされている。動物語を実際に習得する（している）者は、シリーズでは Dolittle の他に、助手の Tommy Stubbins、博物学者の Long Arrow、月にいる古代人 Otho Bludge が挙げられる。彼らは皆人間でありながらも動物語を習得し（Otho Bludge に至っては植物語も習得している）、動物と会話ができる存在である。このように動物語習得者が複数人登場することで、実際に習得するか否かは別として、人間が動物語習得の可能性を潜在させていることが暗示される。反対に、Polynesia や彼女の知り合いのコンゴウインコのように動物が人間の言語を習得している例もある。動物もまた、人間の言語を習得できる可能性を持っているのだ。

さらに、シリーズ続編の *Doctor Dolittle's Post Office* では、鳥にも意図を他者に書いて伝えるための“sign”（75）があることが判明し、Dolittle は手紙という文化に対して人間と動物を同じ地平で語る（75）。そして、Dolittle の協力によって動物たちの文字“animal scribble”が作り出される。

On these trips too the Doctor sometimes accompanied them. He was glad to, because he so got an opportunity of talking with the many different kinds of animals there about the signs they were in the habit of using. And on these signs, which he carefully put down in notebooks, he built up a sort of written language for animals to use – or *animal scribble*, as he called it – the same as he had done with the birds. (*Doctor Dolittle's Post Office* 93)

こうして動物文字が創出され、雑誌が発行されるようになる。作中の動物語を習得し

ていない人間は動物語も、おそらくは“animal scribble”も理解できないだろうが、動物と人間が話し言葉だけでなく書き言葉も各々持っており、それが習得可能であることが何人かの登場人物によって示されることで、作中世界の人間と動物には言語的な差異は、いわば英語と日本語の差異のようなものでしかないように描かれる。ここにおいて、人間と動物は同じ立場である。しかしながら、動物語があることが証明され作中世界の人間数人に理解されるとしても、その世界の大半の人間は動物語が分からない。*Doctor Dolittle's Circus* で Nino という馬が「もの言う馬」としてサーカスの舞台上に立たされているが、彼は人間の言葉を理解しているわけでも、人間に理解できる形で言語を発するわけでもない。Nino はサーカス団の団長 Blossum の合図に従って蹄を踏み鳴らすだけである (*Doctor Dolittle's Circus* 215)。

Dolittle の住む世界における動物と人間の関係について、青木は *Doctor Dolittle's Circus* における動物と人間の関係を例に挙げ、「今挙げたような動物と人間のかかわりは、完全に現実的なものである。人間は自分たちの利益のために、動物を利用し、時に虐待している」(229) と述べている。これもまた動物たちが人間とは異なる「もの言わぬ」存在だと作中の人間たちに考えられているからこそであろう。*The Story of Doctor Dolittle* にもペットとして愛玩される動物、家畜として使役される動物、サーカスなどで見世物にされている動物が登場する。これらの動物と人間の関係は現実のものとかかなり近いと言える。

しかし、動物語の理解者である Dolittle がそこに存在すると彼らの関係は一変する。動物語が理解できる人間がいることが動物たちに知れ渡ると、野生動物はもちろんのこと、「ペット」も家畜の動物もサーカスの動物も自ら Dolittle のもとへやってくる。例えば Sarah を追い出す要因にもなったクロコダイルがそれだ。歯を痛めたクロコダイルは治療のために Dolittle 家へ自ら訪れたまま居座り続け、連れ戻しにきたサーカス団員を怖がらせ追い払ってしまう (*The Story of Doctor Dolittle* 44-45)。それまで人間に支配されていた動物が自らの意思で行動を起こし、もとの人間の支配下から抜け出すようになるのだ。支配する者としての人間と支配される者としての動物が、動物語を理解する Dolittle の登場によってその関係を変化させるのである。また、*The Voyages of Doctor Dolittle* では、Dolittle を通訳者としてイヌが人間の裁判で証言することもある (111-13)。ここには、動物にも意思があり、人間と同等の発言力や行動力を持っていることが示されている。*The Story of Doctor Dolittle* のなかで Polynesia は Dolittle に次のように言う。

“I was thinking about people,” said Polynesia. “People make me sick. They think they’re so wonderful. The world has been going on now for thousands of years,

hasn't it? And the only thing in animal-language that *people* have learned to understand is that when a dog wags his tail he means 'I'm glad!' – it's funny, isn't it? You are the very first man to talk like us. Oh, sometimes people annoy me dreadfully – such airs they put on – talking about 'the dumb animals.' *Dumb!* – Huh! Why, I knew a macaw once who could say 'Good morning!' in seven different ways without once opening his mouth. He could talk every language – and Greek. An old professor with a grey beard bought him. But he didn't stay. He said the old man didn't talk Greek right, and he couldn't stand listening to him teach the language wrong. I often wonder what's become of him. That bird knew more geography than people will ever know. – *People*, Golly! I suppose if people ever learn to fly – like any common hedge-sparrow – we shall never hear the end of it!" (40-41)

作中世界では人間が動物を“dumb”として見なしているが動物の方が知識を多く持っていることが明らかにされるだけでなく、Dolittle と幾人かの人間、そして読者が知っているように動物は“dumb”、すなわち「もの言わぬ／ばか」ではないということが Polynesia から主張される。この Polynesia の主張は、シリーズに登場する多くの動物たちによって裏付けられている。

作中世界における動物と人間の関係は、青木が指摘したように読者が住む世界とほとんど変わらない。動物は野生であったり、人間のペット、家畜、商売道具、あるいは *Doctor Dolittle's Caravan* や *Doctor Dolittle's Zoo* で語られるように動物と人間が友となることもあれば、Dolittle がソーセージを食べることからわかるように (*The Voyages of Doctor Dolittle* 39) 食料であったりする。その理由の一つは動物が言語を持っていても大半の人間がそれを理解できないからだだろう。しかし、〈Doctor Dolittle〉シリーズでは、人間と同様に動物は言語を持っているだけでなく、どの言語も習得可能であり、動物が意思を持って行動を起こせば人間との既存の関係性から脱却あるいはそれを逆転させる可能性があることも示されている。動物と人間の関係は読者の住む世界とほぼ同じ関係だけれども、動物語を理解する Dolittle ともの言う動物によって、動物と人間は対等であることが示されていると言えよう。

## 第2章 作中世界における Dolittle の位置づけ

作中世界における動物の位置づけを確認してきたが、それでは Dolittle は作中世界

においてどこに位置づけられているのか。

彼はもともと人間の医者で、動物好きのために家でいろいろな動物を飼っていた。彼は *The Story of Doctor Dolittle* の冒頭で、きちんとした医者で、“the dogs and the children would all run up and follow behind him; and even the crows that lived in the church-tower would caw and nod their heads” (21) というように子どもと動物に好かれている様子が描写されている。そのような彼は動物の所為で人間の患者が減っていると苦言を呈す Sarah に対し、“[b]ut I like the animals better than the ‘best people,’” (25) と言い、次第に貧乏になっていく。そして *The Story of Doctor Dolittle* 第1章の最後において、町の人々は貧乏になった Dolittle のことを “he hasn’t any money and his stockings are full of holes!” (27) というようになるが、続いて “But the dogs and the cats and the children still ran up and followed him through the town – the same as they had done when he was rich.” (27) と説明される。これらの文章は、Dolittle を取り巻く関係性が「金銭の有無」によって大人と子ども・動物で異なることを示している。Dolittle が金持ちでなくなると Dolittle は大人たちからは嘲笑の対象となり疎外され、対照的に、子どもと動物は Dolittle を慕い続けるという構図になっている。町の多くの大人と Dolittle との関係は財産の多さによって保たれ、子どもと動物とは彼自身の性質によって関係が保たれているのだ。財産の有無にかかわらず Dolittle に惹かれるという点では、子どもと動物は同列の存在と言える。この場面はまだ Dolittle が動物語の存在を知る前だが、既に Dolittle は子どもや動物に好かれる、彼らの中心的存在であり、大人からは疎外された存在であったのだ。

そのような折、Dolittle と近いほとんど唯一といってもよい大人 Matthew Mugg は、Dolittle のネコについての本の詳細さに感心し、Dolittle に “You might have been a cat yourself.” (*The Story of Doctor Dolittle* 29-30) と言って Dolittle を動物である「ネコ」に重ねる。そして、それほどまでに動物に詳しいのだからという理由で、彼は Dolittle に獣医になることを提案する。その話を聞いていた Polynesia から Dolittle は動物語の存在を聞き、それを学び、獣医となる。

動物語を理解できる人間がいると動物たちのなかで噂になった Dolittle の周囲は、彼を頼ってやってくる動物の患者だらけになる。それとは対照的に人間の患者はさらに減り、ついには Dolittle の肉親で彼を除く家での唯一の人間である Sarah は彼のもとを去る。これは Dolittle がクロコダイルを許容できないのであれば家を出ると言ったからであるが、そうして “the Doctor was left all alone with his animal family” (*The Story of Doctor Dolittle* 47) と説明されるように、Dolittle の周囲には人間がいなくなり、動物だけになる。動物を引き連れて町を歩いていた彼は動物の中心的存在



となっていく。

*The Voyages of Doctor Dolittle* 以降では少年 Tommy Stubbins、Matthew Mugg とその妻、Jolliginki 王国の王子 Bumpo らが Dolittle を慕い彼の近くにいるが、*The Story of Doctor Dolittle* では Dolittle は完全に人間の大人の世界から自ら孤立し、動物のなかで生活するようになる。旅のなかで人間と接するものの、彼の行動や興味の中心は動物たちであり、動物たちも彼を救い主として慕う。Dolittle は動物の世界において中心的存在として位置づけられていると言ってもよいだろう。

しかし、Dolittle を慕うのは動物たちだけではない。先にも引用した通り、子どもたちもまた彼を慕っている。Dolittle もまた動物だけでなく子どもも好いていることがシリーズでしばしば描かれる。例えば、彼はお金を稼ぐために行っていたサーカスで子どもたちには無料で見せてあげてしまうこともあることがほのめかされたり (*The Story of Doctor Dolittle* 216)、サーカスを見に来た子どもたちは Dolittle との別れを惜しみ、逆もまた然りであったりする (*Doctor Dolittle's Caravan* 317-19)。既に引用したように、*The Story of Doctor Dolittle* に限定して Shmidt は Dolittle を「子ども (“child”）」として見なしているが、そもそも Dolittle はもともと作中の子どもたちから好かれる存在であり、大人よりも子どもの方が精神的な距離が近いと言える。しかも、彼は子どもたちが「ついて行く」存在である。構図としては、彼は動物たちのなかだけでなく子どもの世界でもリーダーである。このことから、Dolittle は動物の世界の一員であると同時に、子どもの世界の一員でもあると考えられる。

Dolittle は作中世界において、大人たちからは自らの意思で疎外されるような立場にあるが、動物と子どもたちのなかでは中心的存在である。そして、作中世界において、大人の社会とは「財産の有無」が価値判断の基準となっており、逆説的にそうではない社会が動物と子どもの社会だと言うこともできる。とすると、動物と子どももまた作中世界では同じような立場として位置づけられていると言えよう。

### 第3章 Dolittle と彼の「ペット」との関係

それでは、Dolittle と彼の「ペット」は、「ペット」という語が示す関係にあるのか。「ペット」という語は既に引用したようにテキストにおける表現である。しかし実際に物語を読み進めると、この関係は Dolittle が動物語を習得すると変化しているように考えられる。

まず、彼と物語の中心となる動物たち（すなわち彼の「ペット」）との関係を端的に表した部分から確認したい。既に引用した通り Dolittle は、動物語を教わる以前か

ら動物が好きな人間であり、多種の「ペット」を飼っていた。そのなかで特に「お気に入りのペット (“favourite pets”）」として挙げられているのは、後に Dolittle 家の家事を行うことになる Dab-Dab、Jip、Gub-Gub、Polynesia、Too-Too である。この説明の時点では Dolittle はまだ動物語を理解できず、話せもしない。そのような Dolittle と彼とともに暮らす動物について説明する文章は、彼が動物を「ペット」として「飼っていた (kept)」と表現している。

高橋尚子によると、「一般にペットの飼育が上品な趣味になるのは十八世紀末で、労働を離れたペットは次第に家庭にも浸透し、十九世紀半ばにはヴィクトリア時代のペット人気へとつながっていく」(96)。*The Oxford English Dictionary* 第2版 (1989) で“pet”という語を引いてみると、定義1aでは “[a]ny animal that is domesticated or tamed and kept as a favourite, or treated with indulgence and fondness;” と説明されている。また、Marc Shell は、「ペット」について “For many pet lovers . . . [r]ather, pets are family.” (150) と述べ、Paul Shepard は “People keep pets mostly for companionship.” (192) と述べている<sup>3</sup>。「ペット」とは、人間によって愛情を持って、ときには仲間として飼われる動物であり、飼う人間の家族として捉えることもできる存在である。

とはいえ、「ペット」という言葉の背後には少なからず、「飼い主」と「飼われる者」、あるいは「世話をする者」「世話をされる者」という意味における上下関係ができていても言える。これは Dolittle のペットを紹介する先の引用や *The Oxford English Dictionary* の説明に使用されている語を見れば明らかであろう。「ペット」とは人間が「養う、飼う (keep)」ものなのである。「ペット」は確かに家族という側面を持つ存在なのだろうが、「飼い主」と「ペット」の関係は、そもそも「飼い主」という言葉に含まれるように「主」という一種の上下関係が成立しているとも言える。友や仲間、家族として接するとしても、「ペット」のほとんどは、人間である飼い主から食べ物を与えられ、愛玩される、「与えられる」存在だと考えられる。

しかし、Dolittle と彼のペットにおいて、この「世話をする／される」という関係は成立しているのだろうか。この二者の関係は Dolittle が動物語を習得したことによって一部変化しており、一概に「与える者」「与えられる者」と言うことはできない。

もともと動物好きで、Matthew Mugg に動物に近い存在であると言われた Dolittle が実際に動物との会話という交流手段を手に入れるのは、Polynesia という教師による。Polynesia は「ペット」の一員として紹介されたにもかかわらず、ここでは Dolittle を教育する立場になる (*The Story of Doctor Dolittle* 31-32)。Dolittle と Polynesia の関係は、動物語という点において「教えられる者」と「教える者」とい

う関係になっている。知識を「与えられる者」と知識を「与える者」なのだ。

その意味では、Polynesia は Dolittle よりも動物語に関する知識量で圧倒的に勝っており、彼女が教えなければ Dolittle は動物語を知ることもしなかつただろう。また、*The Story of Doctor Dolittle* で Polynesia は182歳か183歳を自称している (41)。それに対して、Dolittle はそこまで年を取っていない。年齢差から両者の経験にも大きく差が生じていることも察せられる。人間の側から見れば Polynesia は確かに Dolittle の「ペット」という立ち位置かもしれないが、Dolittle に動物語という知識を与えるのが Polynesia であるならば、両者は「ペット」と「飼い主」では収まりきらない関係にあるとも考えられる。

Dolittle と彼の「ペット」たちとの関係がさらに変化するのは、家のことを切り盛りしていた Sarah が Dolittle 家を去ってからである。獣医として多くの動物に囲まれるようになった Dolittle は、サーカスから家出してきたクロコダイルを家に置くようになる。そのクロコダイルの所為で、近所に住む人間たちは彼らが飼っている犬や猫を連れてこなくなり、お金が減っていく。加えて床のリノリウムを食べてしまうクロコダイルを追い出すように Dolittle に言う Sarah を、半分は彼女の意志とはいえ Dolittle は家から追い出してしまう。

“I tell you I *will not* have him around,” said Sarah. “He eats the linoleum. If you don’t send him away this minute I’ll – I’ll go and get married!”

“All right,” said the Doctor, “go and get married. It can’t be helped.” And he took down his hat and went out into the garden.

So Sarah Dolittle packed up her things and went off; and the Doctor was left all alone with his animal family. (*The Story of Doctor Dolittle* 46-47)

この場面では、Sarah と対比するような形で Dolittle の「ペット」と表されていた動物たちが“family”という語で表される。先に挙げた Marc Shell の引用の通りであれば、動物好きである Dolittle の「ペット」であった動物たちは既に彼の「家族 (family)」であったと考えられるが、人間の「家族」である Sarah が Dolittle 家という共同体から取り除かれたことによって動物たちは「ペット」という言葉ではなく「家族」という親族的関係性を強調されたとも言えよう。とはいえ、*The Story of Doctor Dolittle* において彼らが「家族」と呼ばれるのはこの場面のみであり、これ以降も動物たちは「ペット」という語を適用されることが多い。このことから、Dolittle の「ペット」は彼の「家族」ではあるものの、用いられる単語という点において動物たちの立場は「ペット」のままである。しかし、一度だけではあるものの、

「ペット」が Dolittle の動物の「家族」として示されていることは、彼らが「ペット」という立場だけではないことをほのめかす。

Dolittle と一緒に暮らす動物たちが単なる「ペット」という立場だけではないことは、その後の彼らの行動によって示されている。Dolittle とともに家に残された「ペット」と呼ばれた動物たちは、Sarah がいなくなった後、新たな行動をするようになる。それは家事と金稼ぎである。なぜなら、Sarah がいなくなり家事をする者がいなくなった上に、Dolittle 家にはお金がなく、財政危機に陥ったからだ。加えて Dolittle は “[m]oney is a nuisance” (*The Story of Doctor Dolittle* 48) と言ってしまうような人間である。しかし、そのような状況に危機的状況を感じるのが彼の「ペット」たちだ。

But soon the animals themselves began to get worried. And one evening when the Doctor was asleep in his chair before the kitchen-fire they began talking it over among themselves in whispers. And the owl, Too-Too, who was good at arithmetic, figured it out that there was only money enough left to last another week – if they each had one meal a day and no more.

Then the parrot said, “I think we all ought to do the housework ourselves. At least we can do that much. After all, it is for our sakes that the old man finds himself so lonely and so poor.” (*The Story of Doctor Dolittle* 48)

そうして炊事洗濯をはじめ Dolittle の「お気に入りのペット」たちが人間が行っていた家事を苦勞しながら行う。しかし、結局資金不足という壁にぶつかる。そのとき「ペット」たちは “Then the animals made a vegetable and flower stall outside the garden-gate and sold radishes and roses to the people that passed by along the road.” (*The Story of Doctor Dolittle* 50) と説明されるように、自ら金を稼ぐようになる。このように、お金がないことに対して行動を起こさない Dolittle に対して動物たちは彼が不在の間に会議を行い、家事担当を決め、金を稼ぐ。彼らは Dolittle と彼らの生活を営むために働く。動物たちが Sarah になり替わって、Dolittle の「世話をして」おり、Dolittle は彼らの恩恵を受けているに過ぎない。もし「ペット」である動物が「世話をされる」対象で、その「飼い主」である Dolittle が「世話をする」存在であるならば、Sarah が Dolittle 家から排除されることによってこの「世話をする／される」関係は逆転するのである。

上記の努力の甲斐なく動物たちは十分な金を稼ぐことはできず、アフリカへ行くための資金は Dolittle 自身がほとんど苦勞せずに借金をして手に入れてくるのだが、

家事や財政を支えたり考えたりするのが主に動物たちであるということは、Dolittle がアフリカへ行ってからも変わらない。Dolittle に借金があることをアフリカの動物たちに伝えるのは彼の「ペット」であり、そこから彼に感謝の意を示すために珍しい動物である pushmi-pullyu に彼について行ってもらい、見世物にして金を稼いでもらおうと考えるのはアフリカの動物たちである。そして、その考えを Dolittle の「ペット」が彼に次のように伝える。“‘This, Doctor,’ said Chee-Chee, ‘is the pushmi-pullyu – the rarest animal of the Africa [sic] jungles, the only two-headed beast in the world! Take him home with you and your fortune’s made. People will pay any money to see him’” (*The Story of Doctor Dolittle* 114). そうして実際に Dolittle はこの方法で金を稼ぐのだが、稼いでいる間にも Dolittle には彼の「ペット」からの監視の目があり続ける。“The Doctor sat in a chair in front taking the sixpences and smiling on the people as they went in; and Dab-Dab was kept busy all the time scolding him because he would let the children in for nothing when she wasn’t looking” (*The Story of Doctor Dolittle* 215-16). この引用からもわかるように、Dolittle はアフリカ旅行を経てもお金に対する感覚は変化していない。それを補い、彼の生活を成立させているのは、最後まで彼の「ペット」なのである。

ここまで彼の「ペット」と呼ばれる動物たちと Dolittle の関係が「ペット」という言葉には収まりきれないことを考察してきたが、Dolittle は彼の「ペット」のことをどのように呼んでいるのかを最後に簡単に述べておきたい。

*The Story of Doctor Dolittle* において Dolittle は、ジャングルの動物に向かって“My friends:” (119) と呼びかけ、海賊に向かってあらゆる動物を“my friends” (169) と言うこともあるが、例えば二頭動物 pushmi-pullyu が Dolittle について行くと言ったとき、彼は“It certainly would make a nice new kind of pet.” (117) というように、「ペット」という語を pushmi-pullyu に適用する。また、海賊に捕まっていたところを救出した少年には Dab-Dab を“one of my pets” (*The Story of Doctor Dolittle* 182) と説明する。あくまで動物たちは「ペット」として Dolittle にも認識されている。

しかし、Dolittle が彼の「ペット」を世話する場面はほとんど見られない。彼は獣医であるので、動物たちに医療を施し、また、彼らの言語を理解できるように、動物たちのために働いている。それだけのためにアフリカまで行く人物である。しかし、例えば彼が「ペット」に餌を与える場面はほとんど描かれぬ。むしろ動物たちに食料を与えられている。アフリカでは Polynesia らがその役割を担い、Puddleby でも“Dab-Dab, who was toasting muffins for his tea,” (*The Story of Doctor Dolittle* 220) というように Dab-Dab が彼の食物を用意している様子が描かれている。Dolittle は家事という点でも「世話される者」なのである。おそらく家事という点において、

Dolittle が「世話される者」であるという立場は、Sarah がいたときも変わらない。その Sarah の立ち位置が彼の「ペット」にすり替わったというだけで、Dolittle の立ち位置は変化していないのだと考えられる。

「世話される者」という点は、Schmidt が指摘した Dolittle が「child」であるという点と重なり合うとも言える。Dolittle は様々なことを「してもらい」、「与えられる」存在であり、家事だけでなく金稼ぎからも遠ざかっている。家事をするもの、金を稼ぐのも、それについて考えるのは彼の「ペット」である動物たちだ。Dolittle がすることと言えば、動物について研究すること、動物に医療を施すこと、彼らの地位の向上に努めることであり、直接金を稼ぐことはない。

これらのことを考慮すると、次のように言える。まず、Dolittle は作中世界の人間の価値観からすれば多くの動物の「飼い主」であり、彼の連れている動物は「ペット」という関係に置かれる。地の文においても Dolittle 自身の言葉においても「ペット」という語が用いられているのは、「ペット」が孕む「家族」という意味合いだけでなく、あくまで人間側の視点が導入されているからだと考えられる。しかし、彼らの関係の実態は、「ペット」という語ではいささか不十分だと考えられる関係になっている。特に、Dolittle の妹 Sarah が Dolittle 家という小さな共同体から飛び出して、あるいは排除されてから、である。既に提示したように、Dolittle 家を取り仕切っていた Sarah が出て行く／排除されると、家事をする存在が不在となり、動物たちがその役割を果たすことになる。「ペット」のなかでもお気に入りの「ペット」たちが Dolittle の寝ている間にそのことを決定し、実際に苦労しながら家事を行うようになるのだ。そこに Dolittle の意思はない。「ペット」が自発的に家事をするのである。これは家事という点において、Dolittle を「世話する」ことである。さらに、金に頓着したくない Dolittle に対し、「ペット」たちは Dolittle 家の財政難に向き合い、常に Dolittle 以上に金について考えている。金を稼ぐのも「ペット」たちである。Dolittle は獣医として働き、実際に Sarah が出て行くまでは金を稼いでいた。それまではおそらく「ペット」たちが自ら金を稼ぐこともなかつただろうし、Sarah がいるために家事をすることもなかつただろう。しかし Sarah が去った後、彼は患者の「世話」はするが、彼の「ペット」たちに基本的に「世話される」側である。Dolittle と彼の「ペット」の関係は、一般的な「ペット」と飼い主との関係とは逆転しているのだ。

このような逆転が生じていることは、この物語の特徴であり面白さであろう。Dolittle は、Schmidt が指摘するように「子ども」（的な存在）であり、医療や動物のために行動すること以外、人間としての社会的な生活能力は著しく低い。それだけでなく、彼は猫肉屋に指摘されたようにもともと動物のような存在で、動物が好きであっ

た。動物との直接的なコミュニケーションの手段を得てからは、彼の周囲は動物で埋め尽くされていると言っても過言ではない。もともと人間社会の中心（いわゆる金儲けを考え、羽振りが善い人々）から外れていた。そのような彼が同じく人間社会の中心から外されある意味では虐げられてきた動物たちと同じ立場なのである。その代り、言葉が通じる医者として彼は動物社会では地位が高く、中心に位置していると言ってもよい。そのような彼は、「ペット」という言葉を自身で動物たちに使用しているものの、その実態は大なり小なりその言葉に潜む上下関係からは逸脱した、あるいはそれと反転した関係を動物たちと築けたのだ。その関係とは、Sarah が Dolittle 家を去った後、テキストで一度だけ使用された「家族」という一つの共同体としての在り方であるとも言える。

## おわりに

Dolittle が生きる世界は、動物語の存在が示されている。異なる種類の動物がどの言語で話しているかという点は基本的に説明されないが、動物にはそれぞれの種類の言語があることが示されている。しかし、作中の人間には一部を除いて理解されていない。そのために、動物と人間の関係は読者が生きる世界と類似した関係となっている。動物たちは野生動物だけでなく、ペット、家畜、サーカスの見世物や食料といった形で人間と関わり合い、多くの人間はしばしば動物を金稼ぎの道具や“dumb”と見なしている。しかし、動物語を通して動物と会話できる Dolittle の存在により、人間よりも賢い動物がいることが明かされ、人間の社会において動物が人間と対等であることが証明されていく。それゆえに、動物と人間の関係はそれまで築いてきたものとは逆転したものになることさえある。

動物と人間の関係を逆転させることさえある Dolittle は、人間の大人からは疎外化され、子どもと動物からは慕われ続ける存在である。動物語の存在を「ペット」から教えられ獣医になると、ますます動物好きの Matthew Mugg (*The Voyages of Doctor Dolittle* 以降からは Tommy や Bumpo) 以外の人間は彼の周囲からいなくなり、動物たちに囲まれて生活するようになる。Dolittle は動物好きであり子ども好きという一面を持っていたが、動物語を習得して以降、彼の優しさが向けられる相手はますます動物（と子ども）となっていく。彼はその意味で動物や子どもに近い存在として描かれる。

そのような Dolittle と彼の「ペット」との関係は、「ペット」という語が暗示する世話をする「飼い主」と世話をされる「ペット」という関係とは異なる在り方をし

ている。作中世界が現実と類似しているという意味では、作中世界の人間に対して Dolittle がともに暮らす動物たちを示す際、「私（彼）のペット」と説明するのは当然のように思われる。しかし、実際には「ペット」と説明された動物たちは家事をし、家計を支え、Dolittle の世話をする。Dolittle が彼らの世話をする姿はほとんど描かれておらず、彼は「ペット」たちの働きの恩恵を享受し、世話をされる側にある。世話をされる存在という点では Dolittle は「ペット」との関係においても「子ども」に近い存在であると言えよう。

Dolittle は動物たち——特に人間に脅かされた動物や野生動物のなかで（同時にアフリカの民族においてですら）、Dolittle は Blount の言うような「リーダー」という立場に置かれる。しかしながら、「Puddleby の Dolittle 家」での Dolittle は、成人男性でありながらも「子ども」のように世話をされる存在である。Dolittle は動物語を理解できるように、作中世界における人間と動物の関係を対等、あるいは逆転できる人物である。そして彼を取り巻く「ペット」たちはそのなかでも知識と知恵がある動物たちである。それゆえに、Dolittle と彼の「ペット」は、「ペット」という語が使用され、Dolittle 自身も使用しながらも、それとは逆転した関係を結んでいると考えられる。

## 註

- 1 Dolittle を描いた物語は、*The Story of Doctor Dolittle* (1920) を第一作とし、*The Voyages of Doctor Dolittle* (1922)、*Doctor Dolittle's Post Office* (1923)、*Doctor Dolittle's Circus* (1924)、*Doctor Dolittle's Zoo* (1925)、*Doctor Dolittle's Caravan* (1926)、*Doctor Dolittle's Garden* (1927)、*Doctor Dolittle in the Moon* (1928)、*Doctor Dolittle's Return* (1933)、*Doctor Dolittle and the Secret Lake* (1948)、*Doctor Dolittle and the Green Canary* (1950)、*Doctor Dolittle's Puddleby Adventures* (1952) まで続く。このほか *Gub Gub's Book: An Encyclopedia of Food* (1932) もあるが、本論文ではこの *Gub Gub's Book* を除いた作品を〈Doctor Dolittle〉シリーズと見なす。
- 2 Suhl は *The Story of Doctor Dolittle* と *The Voyages of Doctor Dolittle* における黒人の描き方を挙げ、人種差別的であると批判した。庄子信・菅原友子による「ドリトル先生とバンポの世界」(1996) では、シリーズの人種差別表現についての検討が行われている。
- 3 ペットを家族と見なす例は、実際のペット愛好家である Betty White の *Betty*



*White's Pet-Love: How Pets Take Care of Us* (1983) における言葉や (White with Watson 16)、Jack C. Horn と Jeff Meer の “The Pleasure of Their Company: A Report on Psychology Today's Survey on Pets and People” (1984) における調査報告にも見られる (Horn and Meer 54)。

## 使用テキスト

- Lofting, Hugh. *Doctor Dolittle and the Green Canary*. London: Jonathan Cape, 1976.  
---. *Doctor Dolittle and the Secret Lake*. London: Jonathan Cape, 1975.  
---. *Doctor Dolittle in the Moon*. London: Jonathan Cape, 1975.  
---. *Doctor Dolittle's Caravan*. London: Jonathan Cape, 1943.  
---. *Doctor Dolittle's Circus*. London: Jonathan Cape, 1976.  
---. *Doctor Dolittle's Garden*. London: Jonathan Cape, 1977.  
---. *Doctor Dolittle's Post Office*. London: Jonathan Cape, 1975.  
---. *Doctor Dolittle's Puddleby Adventures*. London: Jonathan Cape, 1983.  
---. *Doctor Dolittle's Return*. London: Jonathan Cape, 1978.  
---. *Doctor Dolittle's Zoo*. London: Jonathan Cape, 1976.  
---. *The Story of Doctor Dolittle, Being the History of His Peculiar Life and Astonishing Adventures in Foreign Parts*. London: Jonathan Cape, 1981.  
---. *The Voyages of Doctor Dolittle*. London: Jonathan Cape, 1978.

## 引用文献

- 青木由紀子 『七つのテーマから読み解く英米児童文学』 ミネルヴァ書房、2009年  
石井桃子 「「ドリトル先生物語」について」『ドリトル先生アフリカゆき』 ヒュー・ロフティング作、井伏鱒二訳、新版、岩波少年文庫、岩波書店、2000年、187-252頁  
庄子信、菅原友子 「ドリトル先生とパンポの世界」『茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術)』 第45号、1996年3月、49-58頁  
高橋尚子 「ペット——生命へのあこがれ」『英米児童文化55のキーワード』 白井澄子、笹田裕子編著、世界文化シリーズ〈別巻〉①、ミネルヴァ書房、2013年、96-99頁  
南條竹則 『ドリトル先生の世界』 国書刊行会、2011年

- Blount, Margaret. *Animal Land: The Creatures of Children's Fiction*. New York: William Morrow, 1975.
- Egoff, Sheila A. *Worlds Within: Children's Fantasy from the Middle Ages to Today*. Chicago: American Library Association, 1988.
- Elick, Catherine L. *Talking Animals in Children's Fiction: A Critical Study*. North Carolina: MacFarland, 2015.
- Horn, Jack C. and Jeff Meer. "The Pleasure of Their Company: A Report on Psychology Today's Survey on Pets and People." *Psychology Today*, vol. 18, no. 8, August, 1984, pp.52-54, 56, 58.
- Lofting, Hugh. "Hugh Lofting." *The Junior Book of Authors*, edited by Stanley J. Kunitz and Howard Haycraft, 2nd ed., revised, New York: The H. W. Wilson, 1951, pp.198-99.
- Schmidt, Gary D. *Hugh Lofting*. TEAS 496, New York: Twayne Publishers, 1992.
- Shell, Marc. *Children of the Earth: Literature, Politics, and Nationhood*. New York: Oxford University Press, 1993.
- Shepard, Paul. *Thinking Animals: Animals and the Development of Human Intelligence*. Georgia: The University of Georgia Press, 1998.
- Suhl, Isabelle. "The 'Real' Doctor Dolittle." *The Black American in Books for Children: Readings in Racism*, edited by Donnare MacCann and Gloria Woodard, 2nd ed., Metuchen, N. J.: The Scarecrow Press, 1985, pp. 151-61.
- White, Betty with Thomas J. Watson. *Betty White's Pet-Love: How Pets Take Care of Us*. New York: William Morrow, 1983.

## 引用項目

"Pet." Def. 1a. *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 1989.